

ニッポン

ドクター和の



臨終図巻

いよいよ今年も残り1カ月を切りました。みなさんも目まぐるしい師走を送られていることでしょう。しかし、最も健康に留意してもらいたい季節でもあります。一年のうち人が一番亡くなりやすいのが、12〜2月なのです。

厚生労働省の人口動態調査によれば、2016年の年間死亡数の約28%が12〜2月に集中。最も減少する6〜8月は約23%で、その差約5%、6万3768人にも及びます。寒暖差によって血圧の急な変動が起き、心疾患を起す人が増加することも一因だと考えます。

フジテレビ系「とくダネー」などで人気者

32 武藤まき子

長尾和宏（ながお・かずひろ）
医学博士。大阪大学第二内科局長尾クリニックを創業。外来診療で在宅診療まで「人の総合診療を目指す」著「痛くない死に方」は関西国際大学客員教授。

だった芸能リポーターの武藤まき子さんが虚血性心不全で亡くなったのは、2016年12月5日のこと。71歳の誕生日を迎えたばかりでした。

武藤さんが体調不良を訴えたのは、その日の朝。自宅のベッドに横になっていましたが、昼ごろに意識を失い、一緒にいたご家族が救急車を呼んで緊急搬送。搬送先の病院で死亡確認。「自宅で死亡」と診断されたぞ



うです。

翌日の新聞には「突然死」という言葉が大きく躍りました。急性の症状が発現してから24時間以内に亡くなることを、突然死と定義しています。

突然死の大半が虚血性心疾患です。虚血性心疾患は、心臓の周囲を通っている冠動脈という血管が、動脈硬化などによって閉塞し、血液が行き届かなくなることです。心筋の収縮力が弱まり虚血性心不全となるのです。ある日突然に症状が現れるのが、この病気の怖いところ

まず胸の痛みや苦悶感、肩から上腕の痛み、悪心や嘔吐、人によっては下顎痛や歯痛が起きます。短時間（多くは1分以内）で死亡する場合は、突然倒れて意識を消失。悲鳴のようなうめきや、甲高いいびき、口からピンクがかった泡を吹くようなこ

ともあります。

短時間で心停止をした場合、直ちに救急搬送をしても蘇生することはまれです。高血圧や糖尿病、高脂血症などのリスクが多い人に起きることがわかっています。

武藤さんも前日までとてもお元気に過ごされていたそうです。ご家族と一緒に自宅が発症したことが、何よりの救いです。仕事先のホテルで一人の時であれば、「異状死体」として警察沙汰になっていたことでしょう。

しかし武藤さんの逝き方は、決して不幸なものではありません。突然死とは予期せぬ、終末期のない「死」。言い換えれば、これこそがピンピンコロリというものです。

武藤さんは夕刊フジにも亡くなる直前まで連載を持たれていました。タイトルは「つたえびとTVレポーターおまきが行く！」。まさに武藤さんにぴったりです。ききな言葉ですね。

つたえなかつた終末期